

第6回

就学に向けて大切なこと ～乳幼児期を豊かに～



講師 岡村 由紀子 氏

はじめに

今は新型コロナウイルスの影響で、私たち保育者にとって子どもに向き合うのが厳しい時代になってしまいました。私の園でも保育者がマスクやフェイスシールドを着けていくことを検討し、子どもたちの意見も聞いたところ、4歳児の女の子が「先生のお顔が見えるから透明のフェイスシールドがいい」と言いました。これが今の日本の子どもたちの願いだろうと思います。少しでも早い新型コロナウイルスの収束を願いつつ、現場で格闘しつつ、お互いこの時代を乗り越えていきましょう。

I. 教育・保育とは何か?…人格の形成

保育とは、子どもの中に「人間らしく生きていく力」を育てることを目的とし、信頼関係を作り可能性に働きかける仕事です。

II. 保育指導の構造

人格の形成を図る営みである保育は、養護と教育から成り立ちます。養護とは、食事、睡眠、着替え、排泄など生活面で自立する力を育てることで、

「食べられるようになる」「着替えができるようになる」などの力の形成に子ども自ら「意欲的」に取り組むことで、子どもの内面の育ちと結びつき人格の形成に繋がります。

また、教育つまりあそびの中で、保育者の意図的な働きかけで結果として子どもにことば・体・手先などの力が育っていくことです。あそびの中で一番大事なものは、面白さの追求であり、子どもは、あそびが面白い時、意欲的になる。つまり、あそびの中で主人公になり人格の形成が図られるのです。さら

に夢中になってあそんだ経験が、学校に行ってから知的好奇心につながっていくのです。そして、あそびの面白さの追求のためには、生活と準課業が必要です。準課業とは、子どもたちにこういう力を育てていきたいと大人が意図して出会わせるものであり、美術・音楽・体、手先・文学・科学など、保育の5領域にあてはめれば「言葉」「表現」となります。子どもの毎日は、あそびを真ん中にして、生活と準課業があり、それぞれが影響し合っているのです。つまり、自立して生活する力がつくと、あそびが楽しくなりますし、言葉や体、手先など、子どもが使える力が増えるとあそびの種類が増えてくるのです。ですから、「就学に向けて、乳児期は関係ない」というのは違うのです。自立する力は乳時期から育っていくわけで、就学に向かう力は、0歳から育つといえるのです。

III. 学校と幼稚園・保育園の共通性と個別性

学校と保育園・幼稚園の共通性は、子どもが集まることによって生まれる教育力(人間関係)に働きかけることです。つまりいろんな子がいる「集団」の中で、みんなが楽しくなるように過ごすことが大事なのです。園での誕生日会を例にとってみましょう。誕生日はその子にとって特別な日、いわばオンリーワンの日です。ですから、イベントとしてお誕生日会を開くのではなく、保育の中でお散歩に行くときに列の先頭を誕生日の子にして出かけ、お散歩をみんなで楽しむといった具合に、園は集団ならではの、皆で楽しく過ごせる誕生日会を追求していけばいいのです。

逆に個別性としては、夢中になって遊ぶのが幼児

期であるのに対して、学童期は文字と数を使って座って学びますから、おのずと幼児期は間接指導、学童期は直接指導が主となります。間接指導とは、興味・関心をもって取り組む動機付けを創り、意欲的に取り組むように行う指導です。学童期は、今日学習することが提示され、それについて児童が話し合ったり考えたりする直接指導です。

IV. 幼児期そのものが大事な時代・・・学校教育への準備期ではない

・乳幼児の生活やあそびの中で・・・学校へのまなびに繋がる

小学校2年生の国語で習う「かさ地蔵」の話は、園では年中の冬くらいには読み聞かせで聞いています。しかし、学校のようにおじいさんの気持ちまでは答えられません。幼児は、このお話の世界を空想の中で絵を支えにことばを聞いて楽しんでいるのです。実は、乳幼児期の生活やあそびの中で学校へのまなびに繋がることは多いので、乳幼児期を充実させていくことが大切なのです。

① 自立する力の形成

乳幼児期に充実させる力として自立する力の形成があります。小学校で体育の授業のとき、着替えができないのでは、学習を受ける体にはなっていません。排泄も学習時間に行きたくならないよう意識できるようにしていくことが大切です。自分の体がどういう状況なのか体の主人公になること、これが自立する力の形成です。そのためには、0歳児からの積み重ねが大事です。

② しなやかな体と手指の育ち

小さいときほど心と体は繋がっています。乳児からのあそびや生活の中で、行動、生活の主人公になっていることが大切です。背筋を伸ばして、息を吸って脳に酸素が行き届いている状態が、しっかり話を聞く姿勢です。幼児期に鬼ごっこ、かけっこ、散歩をしていくと体ができてきます。物や動きに対し

ての予測判断する力もついてきます。体ができると声の音量も調節できるようになります。行動がコントロールできるようになると心のコントロールもできるようになってきます。その具体例として4歳児のスキップがあげられます。スキップは2つのことを協調して行うものであり、これができるようになると、見通しがつくようになり、我慢ができるようになるという具合です。

今子どもの中にどういう力が育っていて、どういう力を育てていきたいのかを保育の中に意図的に取り入れていくこと、環境をどう生かしていくかが大切です。

③ 豊かな社会性・遊びの豊かな体験

友達と会話をしてあそびを「こうしよう」「ああしよう」という工夫をする中で、交際能力や運営能力が育ちます。

④ 基本的な力を育てる

具体的な生活やあそびの中で、まわりの世界を秩序立てる基本的な力が育ちます。分類や整理、分解したり合成したりする体験は、数の認識につながります。かさや重さ、長さなどの量の概念や上下、左右といった位置や空間の概念も「比べる」などの遊びの中で育つものです。

⑤ 想像力を育てる

0歳児からまねっこ遊びをします。真似ができるということは、記憶力が育ってきているのです。「見立てる」のは1歳児です。積み木を車に見立てて「ブー」と走らせているのは、以前見たバスとその積み木の形が似ているからです。過去に見たものを頭の中で思い起こし、今日の前にあるものと繋げることができるようになるのです。見立てる材料は、日常の経験したことです。2歳児は、「つもり」になって、憧れの人になるなどのあそびを土台に「ごっこあそび」の初期ができてくるのです。そして3歳児になって、自分の生活を再現するごっこあそびが始まります。3歳児は最初、並行あそびが主ですが、

保育者はそれをただ見守るだけでなく、どうしたら子どもと子どもがつながるかを考える指導が大切です。4歳児になると、他者の視点を取り入れるようになります。「～かもしれない」と考え、みんなで共有できるようになるのが楽しく、ごっこあそびも本格的になってきます。5歳児になるとみんなで共有し、目的に向かっていくことができます。乳幼児期は想像の世界と現実の世界とを行き来する特殊な時期です。成長するに従い、想像と現実が独立していきますが、そういう不思議な思考が学童期の抽象思考の土台になるのです。ヴィゴツキーは「文字教育の前の教育とは、想像性である。」と言っています。想像性の土台は記憶であり、イメージすることは学童期だけでなく、大人になっても必要な力になります。

一方、発達障害の子の中には、想像することが苦手な子がいます。そうした子に対しては、見立てる前に「これは葉っぱだね。焼きそばみたいな葉っぱだね」と言うことで、イメージできないことを否定せずに、現実と空想とを結びつける指導が大切になります。

V. 5歳児の保育

1、生活

最後の学年は、物の管理も含め、生活・あそびと共に心地よく生活する為の力を育てていきます。これも乳幼児期からの積み重ねが大事になります。乳児期から「三角の積み木はここに入れてね」「お人形さんはここに寝かしてあげようね」というように繰り返していくと分別する整理能力がついてきます。

見通しを持つ力・段取りを考えて準備する力・気持ちをコントロールする力・他者と協力する力など、生活の中で総合的な力が育ちます。

しかし、時代が移り変わるにつれて子どもが育っていく環境で一番大きく変わったことは家庭内におけるお手伝いの在り方です。かつて子どもは、家

事労働の主人公でした。しかし今は、文明の進歩で昔のようなお手伝いの種類もなくなっています。かつて手伝いは有無を言わずに楽しいことを中断させて働かなくてはなりませんでしたが、その先には役立ち感がありました。したがって手伝いをする中で生活の中で自律的自己コントロール力が育っていたのです。気持ちのコントロールができないと学校へ行って授業が始まっても、自分のやりたいことから気持ちが切り替えられなくなります。今は家庭でのお手伝いができないので、園で役立ち感が得られる体験をすることが大切です。そのときには、「年長だから」という言葉ではなく、「あなたたちがやってくれて嬉しい」と伝えるようにします。生活を丁寧を送ることで、自律的自己コントロール力は着実に身につけていきます。

2、言葉の発達

1) 話し言葉の形成

話を聞いてもらうことで聞く力が育ちます。入学後、小学校に入ってから子どもたちが話を聞くことが難しいのは、その子たちが乳幼児期に大人にどの程度話を聞いてもらっていたかにつながります。子どもが話しているのを「わかったわかった」と大人が聞き流していると、子どもは話さなくなってしまう。他の用事をしていて十分に聞けない時には「～が終わったら聞けるよ」と言ってあげてほしいのです。

2) 書き言葉の世界への準備期

「書く」というのは、人間しかもっていない力です。頭の中で内容を考えて、会話して、自己編集して、ひとまとまりの文章として表現できるようになるのはだいたい9歳くらいです。文字を書くには、空間認知ができるようになることが必要です。ですから、4歳児の後半くらい(人の言っていることがより深く認知できる第二の自我が芽生えるといわれる時期)から「あれ」「これ」ではなく「右の」「上に」などを使って、子どもに上下左右を意識させる

ことが大切です。また、鉛筆を持つためには、幼児期にあそびの中で、泥遊びや粘土遊び、折り紙、三つ編み、お箸を使うなどしてたくさん動く手になっていることが必要です。幼児期の豊かなあそびの経験の中で、言葉を覚えていくことが、文章を作る経験につながります。年長児になったら、しりとり遊びやなぞなぞ、クイズでイメージが広がる遊びなどを意図的に取り入れることが大切です。ただし、文字に関心がない子が苦手意識をもってしまわないように、チーム戦にするなどの配慮が必要です。想像力、集中力も遊びや生活の中で培われていきます。

3、あそび

子どもは、夢中になる楽しいあそびの中でこそ様々な力をつけていきます。特にごっこあそびは、想像力の育ちに大切なあそびです。

あそびを仲間と楽しみ集団化するというのは、あそびにいろいろな子どもが集まってコミュニケーション能力が向上することです。みんなで思考しながらあそびを進めるので、あそびが複雑化していきます。

新しいあそびに挑戦するには、新しい知恵や工夫、話し合いが必要となってきます。

4、友達との関わり

子どもはあそびが楽しいとそれを継続させるためにルールを改変していきます。そこにいる子どもたちがよりおもしろく夢中になってあそぶためには、オンリーワンのルールでいいのです。そして、言葉で伝えようとすることで言語能力が育ちます。みんなで考え行動する楽しさを感じるために、話し合いをすることが大事ですが、話し合いは、結論ありきではなく、自分の意見を言う事を大切にします。「〇ちゃんと同じ」でもよいのです。

折り合いをつけ合意形成をすることが大事な経験なのです。

5、保育の中で大事にすること

- ・学校へ行く喜びを育てていくこと
- ・散歩やリズムあそびで、しなやかな体をつくること
- ・活動の流れの中で切り替えるリズムをつくること
- ・自分を表現することばを大事にするとともに相手の話を聞く力で、話し合う力をつけること
- ・就学に向けて秘密を守ること→自分だけの人間関係
- ・新しいあそびになかまと挑戦し、困ったこと大変なことをみんなで乗り越え喜びや自信にすること
- ・表現活動を豊かにすること(体・描画・音楽・手先)

6、接続期に当たっての子育て・親との連携

すべての活動の基本は、基本的な生活習慣です。ですから、保護者に伝えたいことは次の3点です。

(ア) 元気な体が意欲的な心を作ります

(イ) 自分でできる力を増やしましょう

自分でできる力は、自分への自信になります

(ウ) お手伝いをたくさんやってもらいましょう

就学に向かっては、子どもたちに興味を拡大したり集中したり或いは持続したり中断したりという相反する場面を経験させ、それに対応していくことで自律的自己コントロール力を育てていきます。幼児期の生活やあそびの中で、自律的自己コントロール力を育てることが学校へのまなびに繋がります。

終わりに

幼児期のあそび経験は、「できるかできないか」ではなく、「意欲的に楽しく取り組める」かが大事です。何回失敗しても挑戦するのは、子どもの心の中にある「やりたい」という意思・意欲です。意欲・自信・なかまのつながりの深さを伴った「出来る力」は、自信を育て、これからの学童期に向かって生きる力・学ぶ意欲に繋がっていきます。